
紅い三日月

天原ちづる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅い三日月

【Zコード】

Z8945B

【作者名】

天原ちづる

【あらすじ】

あなたはご存知だろうか。この街に流れる噂を。怪人に狙われたものは、ある条件をクリアしなければならない。さもなくば、待つのは「死」のみ。哀れな犠牲者が最後に見た、紅い三日月の正体とは……。

あなたはご存知だらうか。

街の歪みに生きる、怪人の噂を。

彼に目をつけられたものは、ある条件をクリアしなければならない。
さもなくば、待つのは死。

そしてまた一人、怪人に魅入られた者が、彼のテリトリーへと足を踏み入れた。

ぴちゃぴちゃ。

床に広がる水。

しゃつしゃつ。

床をこするティックキブラシ。

カキーン。

合わされる怪人の鎌。

それは深紅に染まっていた。

染み付いた血の色と匂いが、数え切れないほどの命を刈った証であつた。

冷や汗が背中を流れた。

もはやシャツは水を吸い、重たくなつてゐる。
だがそんなことを気にしている余裕はない。

少しでも手を抜こうものなら、次の瞬間、首は胴体から切り離されるであろう。

出来ることはただ一つ。

この床を、完璧に磨き上げることだけだ。

黒ずんだタイルとタイルの間の汚れが、洗剤の泡とこする力によつて少しずつ、元の白さを取り戻していく。

命がかかっていなければ、掃除というのは苦ではない。

だがこの異常と言える状態の中で、楽しめといつのは無理な話だつた。

聞こえるのは水の流れる音と、『トッキブラシ』で床をこする音、そして自分の息。

心臓は緊張を表すよう、ドキドキといつるセー。

また一筋、汗が流れた。

その怪人が、いつ現れたのかは定かでない。いつの間にか、まことしやかに流れる噂があつただけだ。

“怪人は鎌で首を刈る”

と。

命からがら逃げ帰った人の話というのを、週刊誌で読んだ時は、何を馬鹿な、と思った。

なにせその怪人といつのは、オペラ座の怪人ばりのマスクをつけ、黒マントを羽織つているのだといつ。

出来すぎていて笑えない。

それは口裂け女だと、人面犬なんかと同じく、一過性の噂だらうと思つた。

だから、その怪人の噂もすぐに忘れ去られるだらうと思つていた。自分がその怪人に出くわすまでは……。

確か、夕暮れの繁華街を歩いているはずだつた。

友人と別れて、駅に向かおうとしていたのだ。

その角を曲がれば、もうそこは駅。

そのはずだつた。

だが実際に見たものは、古びたコンクリート校舎の廊下。

どこまでも続くような廊下で、立つてゐる所は水飲み場の前だつた。床はかなり黒ずんでいる。

それを見て、思い出したのだ。

あの怪人の噂を。

恐る恐る振り返ると、そこにはやはり、顔上半分をおおつ白いマスクをつけ、黒いマントを羽織った怪人が立っていた。

少しずつ白さを取り戻してゆく床。

鎌を研ぐ怪人。

どこまでも続く廊下。

一心不乱に磨き続けている自分。

なにもかもが非日常だった。

汗で額に髪の毛が張り付く。

が、そんなことを気にしている余裕もない。

ただ、床を磨くことだけに集中する。

どれくらいの時が経ったのだろう。

それは三十分くらいのようにも思えたし、一回以上だったようにも思えた。

だがやつと、床を磨き上げることが出来たのだ。

どこもかしこも真っ白に光っている。

これで殺されずに済む。元の日々に帰れるのだ。

そう思うと、自然と笑みがこぼれた。

しかし怪人は、黙つてある一点を指差す。

そこには、ほんのわずかではあったが、黒いシミがあった。

こ ろ サ れ る !

きらりと紅く、鎌が光った。

ゆっくりと持ち上げられる鎌。

それを見て、一目散に逃げ出す。

どこまでも続く廊下を、水に足を取られながらも、全速力で逃げた。
死にたくなかつた。

後ろから怪人が追つてくるのが、気配で分かつた。

怪人は音を立てずに、マントをひるがえして追つてくる。

口から言葉にならない叫び声が溢れた。

人は窮地きゆうぢに追い込まれると、言葉を失うのだと初めて知つた。

正面の窓に、怪人の顔が映つた。

その口元は歪んでいる。

笑つているのか、泣いているのかは分からない。

窓の外に紅い三日月が見えた。

それは窓に映つた怪人の鎌なのだと、一瞬後に気付く。

そして、全てがブラックアウトした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8945b/>

紅い三日月

2010年12月13日11時50分発行